



## 分子研を去るにあたり

## 村橋 哲郎

東京工業大学大学院 理工学研究科応用化学専攻 教授  
(前協奏分子システム研究センター 教授)



## 「ゆめ」は続く

むらはし・つろう / 1995年大阪大学工学部卒業、1999年大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了、1999年大阪大学大学院工学研究科助手、2003年日本学術振興会海外特別研究員（マサチューセッツ工科大学化学科）、2007年大阪大学大学院工学研究科准教授、2012年分子科学研究所教授、2015年より現職。

大峯所長をはじめ、分子研の皆様には、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。分子研で充実した日々を過ごすことができたことを感謝申し上げます。岡崎を離れて数ヶ月が経ち、分子研スタイルにフィットしていた私自身は再び大学スタイルを取り戻しました。キャンパスに多数の学生が闊歩する光景、人波の中での電車通勤にも慣れて、日常化しています。分子研赴任当時のことを思い出しながら、研究室セットアップや体制づくりに取り組んでいるところです。

あの頃。まだ三十代だった私は、分子研で新しくグループを率いる機会を与えられました。それまでずっと大学で過ごしてきた私にとって、研究所の雰囲気、流儀はとても新鮮でした。研究室整備は、所長から十分なサポートをいただいて予想以上に迅速に進み、「研究所の威力」を実感しました。はじめは3名でスタートしたグループ規模も、年毎に大きくしていくことができました。加えて、私を強く後押ししてくれたのは、分子研が持つ「オリジナリティの追求」への強い姿勢です。分子研に赴任した4月にまず臨んだヒアリングは印象的でした。大峯所長が分

子研PIを集めて、各々の研究グループの研究方針等を討論する場です。そこで交わされる議論の中で、個々の研究者が持つ独特の感性を色濃く反映させながら取り組むことが最優先で尊重されていることを強く実感しました。この良き分子研の追求姿勢は、よく「分子研の伝統」で説明されがちです。しかし、私自身、分子研に身を置いてよくわかったことは、決して伝統だけではないということです。所長、教授をはじめとする現役メンバーによってこの姿勢が作り出され、科学の不断の進歩を担っています。私も、この姿勢に後押しされ、思い切った研究を進めることができました。分子研に赴任後、私自身のキャリアにおける代表的成果のひとつになるであろう成果も論文発表できました。同僚にも恵まれました。特に、私は、同時に三名の教授が着任したうちの一人であったこともあり、同じ世代の同志がいたことは幸運でした。

今、大学に戻り、再び研究と教育を両立させる立場に復帰した私にとって、私自身の研究をさらに推し進めるとともに、将来のある有為な若者たちをいかに導くことができるかが、これから

の大きな課題であり目標です。化学の道を志し、これまで幸いにも第一線で研究する機会を得てきました。大学で新しいスタートを切り、私の「ゆめ」は続いています。

**山口 拓実** 北陸先端科学技術大学院大学 マテリアルサイエンス研究科 准教授  
(前 生命・錯体分子科学研究領域 助教)



## 分子研の包容力

やまぐち・たくみ / 2008年東京大学大学院工学系研究科応用化学専攻博士課程 修了、同年5月より分子科学研究所／岡崎統合バイオサイエンスセンター 助教、2015年10月より現職。  
寒さが苦手なので、初めての北陸の冬を心配しながら過ごす今日このごろです。

分子研での私の日々は、何よりその包容力に支えられてのものでした。ご存知の方もおられるかと思いますが、分子研への着任にあたり、私は研究分野を大きく変える決断をしています。新しい環境というのは、期待と不安に満ちたものであることは常ですが、当時は周囲を飛び交う用語がまるで魔法の言葉に聞こえるような有様でしたから、緊張も強く、悩むことも多くありました。そんな私にとって、分子研の多面性 <バイオ関連の先端的な環境に囲まれながらも、ふとしたおりにバックグラウンドである錯体化学に触れ合うことができる> には、多様な存在を受入れ、時に厳しくも励ます包容力を感じました。分子研が誇る920MHz

NMR装置を震えながら触った日々や、施設見学者を前に大見得を切ったことは、今ではよい思い出です。

また、所内の異分野交流はもちろん、統合バイオの活動を通じて得た生理研や基生研との交流、さらには天文台、核融合研の知り合いもでき、これらは大きな財産となりました。分子科学に深く向き合うとともに、幅広く自然科学への門戸を開く。現在の分子研の大きな魅力ではないかと思っています。

分子研での思い出と言えば、国際交流についても欠かせません。アジアコア事業やJENESYSプログラム (JSPS 事業「若手研究者交流支援事業～東アジア首脳会議参加国からの招へい～」) など、様々なプロジェクトで大変お世

話になりました。多国籍な研究員や総研大生に囲まれ、多くの友人に恵まれました。

新任地である北陸先端大は、総研大と同様の大学院大学であり、学生集めが重要課題となっています。国内はもちろん、先だつては中国へ、年明けにはインドへ、大学間連携の行事で訪問します。国際交流はますます広がっていきそうです。

加藤晃一教授はじめ、本当に多くの方に支えられ、感謝は述べきれません。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。

## 覧古考新02 | 1971年

化学の進歩に基いて、今日ではおよそ二百万種にのぼる分子が知られるに至りました。それらの分子は、われわれが日常経験する物質のみでなく、広く生物体の組織をも含んだ諸物質の機能を担う根源とみなされるものであります。すなわち分子は、物質の単なる「成り立ち」を意味するものとしてではなく、その「働きの生ずる機構」として認識されるに至りました。それ故、直接個々の分子に肉迫して分子のもつ機能を探求し、その可能性を開発することを目的とする「分子科学」が重視されるに至ったのは当然のことです。

分子科学はその言葉自身が新しいように、実は物理学と化学を土台として発展した比較的新しい科学の分野であります。しかし、物質科学の将来を予見するならば、そのなかで占める分子科学の役割は極めて大きいものとなるでありましょう。そのみでなく生物科学の将来に対して、分子科学の方法は大きな貢献をすることでありましょう。それ故われわれは、分子科学の発展をはかり研究者の育成につとめることを重大な責務と考えております。

特定研究分子科学研究班『分子科学によせて』1971年  
赤松秀雄 (日本学術会議化学研究連絡委員会所属 分子科学研究所小委員会)